

近畿大学大学院 学生員○栄 健一郎 阪急電鉄

正会員 土井 勉

阪急電鉄

木内 徹

近畿大学理工学部 正会員 北川 博巳

近畿大学理工学部 正会員 三星 昭宏

1. はじめに

現在、都市の個性化を促すような地域計画が重要である。都市の個性化を考える上で、地域の人々がその地に抱く潜在的な“思い入れ”すなわち地域イメージを明らかにする必要がある。従来の研究では西井による類似度やLogMapなどに着目した分析¹⁾や佐佐木らによる民話を用いた分析²⁾などがあるが、本研究では、その一環として、関西の私鉄3線を例にとり、地域のイメージ構造を評価・検討するものである。

2. 研究の概要

着目した私鉄3線は、阪急神戸線、近鉄奈良線、南海本線・高野線とし、沿線に住んでいる人及びその私鉄利用している人を対象とした制限連想法とSD法によるアンケート調査を行った。調査票を作成するに際し、地域をイメージする様々な名詞を2つの名詞群に分類した。1つは、「山」、「鉄道」など一般的な名詞を表す普通名詞群であり、もう1つは、「六甲山」、「阪急」などその地域にしか存在しない名詞を表す固有名詞群（構成地物）である。多数ある名詞の中で普通名詞群の総数を121個、固有名詞群の総数を、阪急沿線で148個、近鉄・南海沿線で117個設定した。アンケート方法は、最初に被験者の住まわちをイメージする普通名詞を普通名詞群の中から20～25個被験者に選ばせる（名詞群A）。次に、被験者が選んだ名詞群Aの特定の名詞についてそれに最もイメージが似ている名詞を名詞群Aの中から重複しないように選ばせる（名詞群B1）。そして、同様に2番目にイメージが似ている名詞を名詞群Aの中から重複しないように選ばせる（名詞群B2）。さらに、名詞群Aの中から最もイメージの強い普通名詞を5個選ばせ、SD法によって11組の形容詞対について評価してもらう。最後に被験者の住まわちのイメージについてもSD法によって評価してもらう。以上のことを構成地物についても同様に行い、最後に“沿線地域”のイメージをSD法によって評価する。性別（男女）、職業（社会人、学生）を均等になるように考慮してアンケートを配布した。標本数は阪急沿線で150票、近鉄沿線で132票、南海沿線で107票、総計389票となった。

3. 分析方法

名詞群Aと名詞群B1に着目して分析を行った。まず、各路線において標本数に対する名詞群Aの特定の名詞をイメージした人の数の割合を「想起率」と呼ぶ。また、名詞群Aの特定の名詞からイメージした人の数を分母にとり、名詞群Aの名詞から名詞群B1の特定の名詞をイメージした人の数を分子とした時の値を「類似度尺度」と呼び、それらを地域イメージ構成を見るための指標とした。これよりイメージマップを作成した。また、SD法による評価として、プロフィール分析を行った。

4. 普通名詞による3線比較

普通名詞によるイメージマップを作成した結果、3線とも図1に示す阪急沿線のイメージマップによく似たイメージ構造になっている。例えば、「住宅地」と「公園」の関係を見た場合、3線とも、2つの想起率は60%を越えており、類似度尺度を見ると「公園」から「住宅地」をイメ

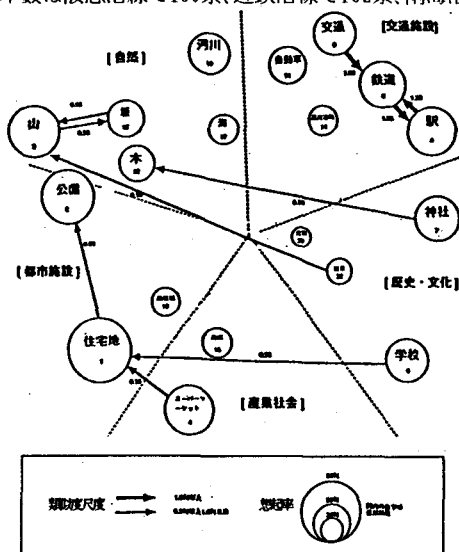


図1 阪急沿線の普通名詞のイメージマップ

Kenichiro SAKAE, Tsutomu DOI, Tohru KIUTI, Hiroshi KITAGAWA, Akihiro MIHOSHI,

ージするときより「住宅地」から「公園」をイメージする方が値が大きい、このため、住宅地の中に公園が存在するということが人々にとって一般的なイメージであると考えられる。しかし、各沿線独特の特徴を表す普通名詞イメージ構造もある。例えば、近鉄・南海沿線における「神社」と「祭」の類似度尺度の値は大きい、阪急沿線ではそのような傾向が見られない。また、近鉄・南海沿線では「神社」、「史跡」の想起率が共に高いが、阪急沿線では「神社」の想起率は高く、「史跡」の想起率は低い。故に、近鉄・南海沿線は歴史の流れを感じる都市のイメージがあり、神社を中心とする祭の存在が地域イメージの構成に重要な要因となっている。ところが、阪急沿線は比較的新しい住宅都市のイメージがあり、風土や伝統など歴史を感じるものが他の2線より少ないと考えられる。

5. 構成地物による3線のイメージ構造

普通名詞の場合と異なり3線とも沿線固有のイメージ構造をもっている。図2は、阪急沿線の構成地物イメージ構造を示すが、「宝塚歌劇」や「阪急百貨店」などの阪急沿線施設と「六甲山」や「夙川」などの阪急沿線の自然の2つに大きく分けることができる。さらに前者は「梅田近辺」、「西宮北口近辺」、「宝塚近辺」、後者は「六甲山近辺」、「夙川近辺」に細かく分けることができる。近鉄沿線では、「奈良近辺」、「生駒山近辺」、「近鉄沿線施設」の3つに大きく分けることができ、南海沿線の場合では、「難波近辺」、「堺近辺」、「南海沿線施設」の3つに分けることができる。想起率では、阪急沿線の「六甲山」、近鉄沿線の「生駒山」、南海沿線の「高野山」と、3線とも山の想起率が高く、80~90%の値を示している。よって、山が3線の各私鉄沿線をイメージするランドマークとして極めて重要な存在であることがわかる。

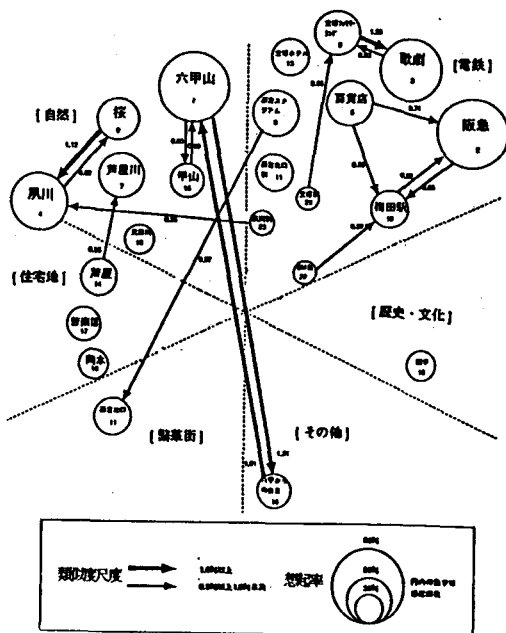


図2 阪急沿線の構成地物のイメージマップ

6. まとめ

普通名詞のイメージ構造は、3線ともほぼ同じであるが、構成地物のイメージ構造は、沿線によって異なっている。これは、SD法による分析でも同じ結果となった。図3は、「山」のイメージプロフィールを示しているが、普通名詞のほうは3線とも似たような分布であるが、構成地物では異なった分布になり、地域固有のイメージプロフィールをうかがうことができる。このことより普通名詞には地域性に関与しない潜在的なイメージプロフィールが存在し、ユングの言う「普遍的無意識」あるいは「集団的無意識」によってこのような結果になったのかもしれない。今後、性別や年齢の違いによってイメージ構造がどのように変化するかを分析、検討を進めていきたい。

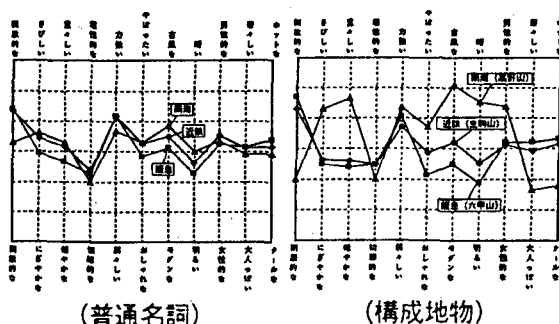


図3 「山」のイメージプロフィール

【参考文献】

- 1) 西井和夫: 『地域イメージとその構成に関する風土分析手法』土木計画学研究・講演集 No. 14(1) 1991
- 2) 竹村雄雄、佐佐木綱、東徹: 『民謡を用いた地域づくりに関する研究』土木計画学研究・講演集 No. 14(1) 1991